

ロータリーの生きる道

平塚北 山梨熙一郎

現在、ロータリーは会員減少という難問を突きつけられています。そして強引な会員増強を行った結果として、ロータリアンとしてはふさわしくない会員を増やしてしまったことを反省させられています。

ロータリーは宗教でもなければ、その代用物でもない。年々複雑細分化し過ぎて、相互の連携が難しくなり、「木を見て森を見ず」の弊害が心配されます。

ロータリーの奉仕は個人個人の善意によるもので、心を求める精神的な奉仕が本筋でしたが、いまや他人の金で奉仕する団体、組織を維持するためのものとなってきました。

また一方通行の巨大化が進み、「ロータリーの簡素化」は一体どこへ行ってしまったのか。今こそロータリーの基本理念である「慈愛」「献身」に立ち返って活動を展開する必要があると思います。

温故知新：歴史を振り返る

不易流行：ロータリーの理念は不易である
この二つの言葉こそ奉仕の原点であると同時に、ポール・ハリスは、ロータリーを「平和の世界のミニチュアである」と言っています。つまるところ、「慈愛」こそ原動力であり、巨大大さを求めるのは、自己破壊に通じます。これからは知恵やエネルギーを博愛と利他の精神に変えて、超民主主義社会の実現に使ってほしいものです。

親密な群れの限界は、四〇〜五〇人と考えます。ですから会員増強するなら、子クラブ、孫クラブをつくり拡大していくのがよいのではないのでしょうか。また職業分類の原則を守ることが必要で、多様性のある会員構成を図るべきだと思います。

(第一七八〇地区 神奈川県 内科医)